



スカーフ論争とは…

フランスの植民地だった北アフリカから、戦後、労働者不足を補うためフランスに移住してきたアラブ人ムスリムの二世、三世にあたる女子生徒たちが、イスラームのスカーフ（ヒジャーブ）をまとい公立学校に通うことの是非をめぐる論争のこと。少女たちに「スカーフをぬぐか学校を出ていくか」を迫ったのは、むき出しのイスラモフォビア^{イスラモフォビア}のイスラーム憎悪を表明する極右集団だけではない。ヒジャーブを「男尊女卑の象徴」、^{レイシステ}「フランスの政教分離原則に反する」などとして、少なからぬ左派・リベラル層からも着用禁止を支持する意見が噴出、「ムスリム系マイノリティに同化か排除を迫るレイシズムに他ならない」などと批判する者たちとの間で激しい議論が繰り返された。2004年には「宗教的シンボル禁止法」が制定され、問題は今も続いている。本作『スカーフ論争』は、陰湿な迫害を受けつつもスカーフをまとう当事者たちや支援者の声、論争を記録したドキュメンタリー。「人権の祖国」における「隠れたレイシズム」をあぶり出す。



藤永 壯 (ふじなが・たけし)

1959年、山口県生まれ。朝鮮近現代史専攻。現在、大阪産業大学 人間環境学部教授。共編著に『日本の植民地支配—肯定・賛美論を検証する』（岩波書店、2001年）、『故郷の家族、北の家族—在日済州人の生活史2』（韓国語、ソニン、2015年）、共著に『「韓国併合」100年と日本の歴史学—「植民地責任」論の視座から』（青木書店、2011年）、『慰安婦問題を／から考える—軍事性暴力と日常世界』（岩波書店、2014年）など多数。「朝鮮高級学校無償化を求める連絡会・大阪」共同代表。



菊池 恵介 (きくち・けいすけ)

1968年生まれ。東京外国語大学卒業後、ブリュッセル自由大学、パリ第12大学博士課程を経て、現在は同志社大学グローバル・スタディーズ研究科准教授。専門は思想史（哲学・社会思想史）、社会学（グローバリゼーション論、レイシズム研究、フランス地域研究）。共著に『歴史と責任：『慰安婦』問題と1990年代』（新曜社、2008年）、など。「スカーフ論争—問われるフランス共和主義」（季刊『前夜』第二号、2005年）をはじめ問題を巡る論考も多数。本作の日本語字幕作成者でもある。



鵜飼 哲 (うかい・さとし)

1955年生まれ。京都大学大学院文学研究科修士課程修了後、1984年から1988年までパリ第8大学に留学しジャック・デリダに師事する。現在、一橋大学大学院言語社会研究科教授。専門はフランス文学・哲学。著書に、『償いのアルケオロジー』（河出書房新社、1997年）、『抵抗への招待』（みすず書房、1997年）、『応答する力—来るべき言葉たちへ』（青土社、2003年）、『主権のかなたで』（岩波書店、2008年）、『ジャッキー・デリダの墓』（みすず書房、2014年）ほか多数。